

隅田川と江東地域 ①

東京低地の形成と隅田川

江東区深川江戸資料館

江東区の土地は、隅田川と荒川の間広がるデルタ（三角州）です。本区の歴史は、隅田川と深い繋がりがああります。多くの文人がつどった風光明媚な景観も、江戸に運ばれてくる物資の集散地としてのにぎわいも、木場の繁栄も、隅田川がなければ成り立ちませんでした。今号から6号に亘って、隅田川と江東地域のかかわりや、隅田川がもたらした江東のさまざまなすがたについてみていきます。

冒頭の今号では、隅田川を含む「東京低地」とよばれる地域の地理的な成り立ちから述べていきます。



「武蔵国図」（国立公文書館所蔵・慶安期、『江東区史』上巻付図より転載）

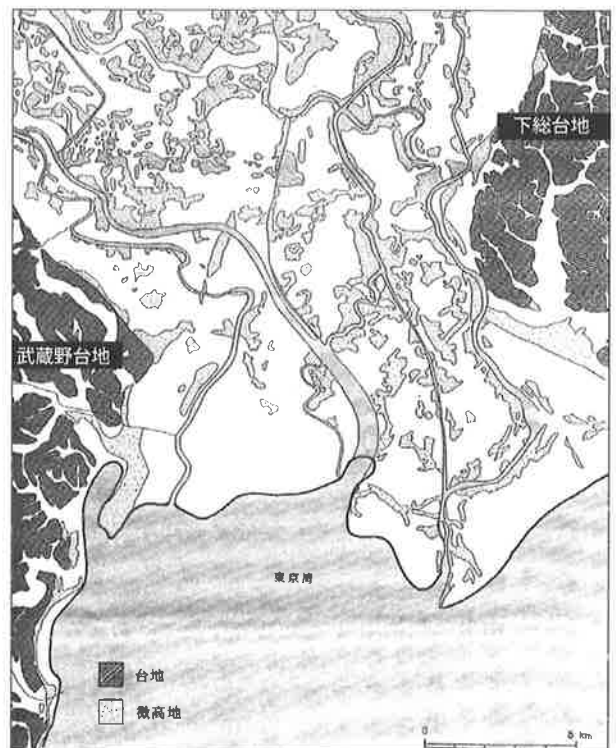
東京低地の形成—太古の江東—

まず、遠い昔の江東区域の地形について触れてみましょう。太古、約10万年周期で「氷期」と「間氷期」が繰り返されるなか、間氷期には、氷河が融けるため海水面が上昇して江東区のような海岸沿いの低地は水没します。氷期には凍って海水の量が少なくなり、海

水準が下がるため日本列島は大陸と陸続きになり、江東区は沖合いまで陸地になります。

氷河時代であった約2万年前ごろの武蔵野台地は、火山噴火の影響を受けながら旧石器時代人が針葉樹の森で狩猟生活を送っていたらしいことが、火山灰などから成るローム層の化石からわかりますが、江東区を含む「東京低地」では、地表にローム層はみられません。間氷期になって氷河が融ければ海の底になって、火山灰の堆積はないからです。そして、約1万年前、地球全体が急速に温暖化して6,000年前頃には、荒川沿いに川越付近まで海岸線は北上しました。これが「縄文海進」です。縄文時代前期江東区は海の底で、縄文人が丸木舟で漁をしていました。その後、海面がやや下がり、東京湾に利根川や荒川のデルタが広がります。

こうして形成された「東京低地」とは、上野から赤羽に連続する崖線の西の武蔵野台地と、千葉県松戸市から市川市にのびる下総台地に挟まれた沖積地をさします。隅田川は、その中央を流れる大河でした。



東京低地地形図（葛飾区郷土と天文の博物館刊「下町・中世再発見」より転載）

古代・中世の隅田川となどころ

利根川の下流であった隅田川は、古代・中世において、さまざまな史料のなかにあらわれるようになります。浅草砂洲の浅草寺は、文献とあわせ出土品などから、奈良時代には寺院が成立していたことが知られます。

承和2年(835)の文献には、「住田河」の名称がみられ、また、『伊勢物語』(延喜、901～22)には武蔵・下総国境の「住田河」が舞台となった一節があり、在原業平の歌「名にしおはば いざこととはん都鳥わが思ふ人はありやなしやと」は有名です。『更級日記』(康平3年、1060ごろ)にも「住田川の渡」が出てきます。この時代の隅田川がどこからどこまでをさしたのか必ずしも明確でないのですが、概ね千住付近から下流と考えられています。

この流域には、歌枕になった古代からの地名『などころ』や、中世の隅田川をめぐる伝承も点在します。先に紹介した在原業平の歌は、石浜(荒川区南千住から台東区橋場あたり)が舞台と伝えられています。現在の白鬚橋あたりに渡しがあって、室町時代に農村とは明らかに異なる人や物の流入があったというような所をさす「都市的な場」であったことで注目されています。浅草寺周辺も同じく隅田川流域の「都市的な場」として注目されます。

亀戸4丁目に建つ常光寺は、「六阿弥陀もうで」6番目の寺として有名です。春秋の彼岸に阿弥陀仏を祀る6ヶ寺を巡礼する行事として明治末ごろまで盛んであった六阿弥陀もうでは、「荒川の対岸に嫁いだ娘が離縁されて入水したのを悲しんだある父親が、行基に6体の阿弥陀仏像を彫ってもらい、6つの寺に安置した」という伝説を持っています。鎌倉時代の初め荒川をはさんで足立氏と豊島氏が本拠地を構えていたことがこの伝承の背景となったと思われます。6ヶ寺中3ヶ寺が、北区豊島・足立区江北・江東区亀戸と、隅田川を中心とした水路で詣でることができる場所に所在していることは注目されます。

また、中世の利根川は「隅田川」とよばれていました。これを裏づけるように、現在「古隅田川」の名称が、埼玉県岩槻・春日部と、東京都葛飾足立区境の2ヵ所

の川に残り、いずれも武蔵・下総国境に位置しています。

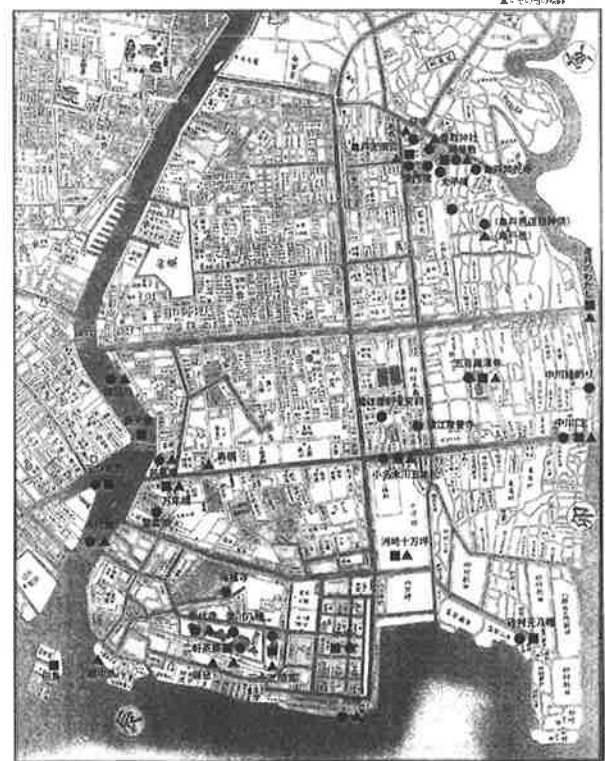
「などころ」から江戸の名所へ

江戸幕府が成立すると、このような「などころ」「都市的な場」を起源とする中世以来の盛り場のほか、新しい名所がうまれます。

風光明媚な江東の地は、江戸時代後期、庶民の「行動文化」の隆盛のなかで、江戸郊外の行楽の地として名所めぐりの人々を迎えて賑わいます。江戸名所の成立です。

江戸の名所は、『江戸名所図会』(天保7・1836)、『名所江戸百景』(安政3～5・1855～57)など、多くの絵画に描かれます。地図にみるとおり、江東の地に点在する江戸名所の多くが、隅田川および周辺の水辺に集中していることがわかります。江戸の人々にとって隅田川は、江戸の風景そのものであったといえるかもしれません。

錦絵に描かれた江東の名所(天保14年「天保江戸絵図」部分)



現在では、隅田川は北区の岩淵水門で分かれた荒川の流れが、足立区・荒川区・台東区・墨田区・中央区・江東区を通り東京湾に注ぐまでの間をさしています。

これは、昭和のはじめ、荒川放水路が現在の形で完成して以降のことです。